

県立多治見病院 緩和ケアチーム通信



発行：県立多治見病院 緩和ケアチーム 2016年 9月号 VOL.66



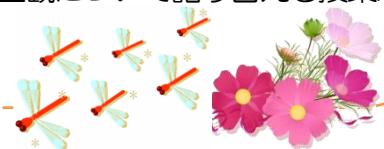
文責：志津匡人・大津陽子 編集：櫻田亜矢子

こんにちは、緩和ケアチーム身体症状担当の呼吸器内科、志津匡人です。最近呼吸器内科の仕事が忙しく、緩和ケアチームのカンファレンスや勉強会などにもなかなか顔を出すことが出来ていません。チームの一員として、申し訳なく思っております。

チーム通信の本題に入りますが、普段呼吸器内科として診療しているため、肺癌の治療の中心は化学療法であり、その治療の目的の大半は根治ではなく、あくまで病勢コントロールということになります。そのためいつの日かは、治療自体が困難となり、療養の場を選択しなければならない日が来ます。その際に選択肢として、在宅がいいのか、病院がいいのか、病院の中でも緩和ケア病棟がいいのか？というお話をすることが多いです。最終的にはその人が選んだ場所が正解であることが多いように感じます。入院を極力避けてきた人でも緩和ケア病棟で最期を迎えられてよかったといわれる方も見えます。僕自身は緩和ケア病棟医としても在宅医としても働いたことはないですが、おそらく本人のことを家族、医療スタッフを含めた周りからしっかりと包める場所であれば、それが一番だと思っています。（ただ主治医としては、せっかく縁のあった患者さん、できれば自分で看取りが出来れば…なんて考えてはいますが。）もし療養の場の選択などで困ることがあれば、ぜひ緩和ケアチームにご相談ください。



緩和ケアチームがん性疼痛看護認定看護師の大津です。夜がだいぶ涼しくなりすっかり秋めいてまいりました。そんな中私は看護学校の講義の準備をしています。第一回目の講義は「死を考える」です。初回から大変大きなテーマで、講義の準備をしながら私の頭の中はパニック状態です。「死を考えることは生きることを考えること」教科書の中にあっただ一文を見ながら、自分の死生観も改めて考えました。私は今「やりきった」と思いながら就寝前に少しのお酒をたしなむのが日課です。そして録画した「とと姉ちゃん」を見ながら、「お互い働く女性として今日も頑張ったね。家族っていいよね。小さな幸せっていいよね。」と思いながら一日を終えることが幸せです。誰が最期を看取ってくれるのか一抹の不安はありますが、「自分頑張ったなあ、自分の人生幸せだったなあ」と思いながら旅立ちが迎えられるように今を生きています。看護学生さんたちと死生観について語り合える授業が楽しみです。



第4回 緩和ケア講演会

日時：平成28年10月13日(木) 18:00~19:30

場所：中央診療棟3階 講堂

内容：緩和ケア病棟・ショートステイ・在宅医療機関との連携で
“最期は家で”との希望を支えた事例

発表者：県立多治見病院緩和ケア病棟スタッフ・高井病院スタッフ
ショートステイつくしスタッフ

10月の勉強会予定

